
N高徒然記

電球

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

プロローグ（前書き）

投稿第三作目、初めての長編に挑戦（する予定）です。

拙作『私はイモムシ』と話が連動しています

興味が沸いた方はこちらでもご一読いただけると大変有難いです。

プロローグ

ある日、俺が教室に入ると、川田という女子の頭の上にイモムシが乗っかっていた。
意味が分からない。

「よう、今日からお前のあだ名はイモムシ女な」

そう言っつて川田の肩を叩くと、突然あいつは切れた。
一瞬の隙をつかれた。
気がつくと俺の視線は空中を半回転している。

(こりゃあ、内股だな)

地面に叩きつけられる。
川田の啖呵が聞こえた。

「おんどりゃ、今なんてぬかしたボケ!! あ? イモムシ? どっちがイモムシや? お前か? うちか! ? あ?」

意味が分からない。
俺は泣きたくなかった。

魔女の噂

N高の一年C組、俺は柔道部に所属していた。

俺はもともと柔道の素質はそれなりにあったのだろう。

小学生のころは地域の柔道大会で賞を総なめにし、

地元では少しばかり知られた存在であった。

中学に入っても俺は恵まれた体格を武器に、相手を力でねじ伏せることができた。

しかし、当時から根本的な問題があった。

俺は強くなるために練習することが好きではなかった。

要するにヘタレである。

高校に入り、当然のように柔道部からスカウトを受けた。

体格から誤解を受けることも多いが、根は繊細で気弱な俺である。

その誘いを断ることができなかった。

しかし高校生の柔道ともなると厳しい。

もはや体格を活かしてだけの試合運びでは通用しなくなる。

毎日先輩から苦も無く投げられる日々に、

自信を喪失しかけていた時、とある事件が起こる。

クラスメイトの川田という女子生徒に、見事な内股で投げ飛ばされたのだ。

自分の一言に、彼女がぶち切れしたというのが事の顛末だが、どうしてそうなってしまったのか、いまだに良く分からない。

全く女というのは怖い、という教訓を得て、

その日の部活に励んでいると、部長がこちらを睨んでいる。

「生野、ちょっとこっち来い」

実に悪い予感がした。

「生野、聞いたぞ。お前、クラス的女子に投げ飛ばされたんだってな」

「はあ……」

俺はなんとも間の抜けた返事をした。

「全く情けない。だいたいな、最近のお前は……」

部長の話はとかく長くて要領を得ない。

要約すると、最近の自分はいかに柔道に不熱心で駄目な人間であるかを

くどくどと説明しているようだった

「だから、女にも負けちまうんだよ」

「はあ……」

俺が相変わらず間の抜けた返事を返すと、すかさず部長が尋ねてきた。

「で、生野、その女つてのはどんなやつなんだ?」

部長の関心はそこか。

「どつって言われても……よくわからねえ奴ツスよ。第一クラスの誰とも喋らないし。」

ただ、身長は女子にしてはかなり高いツスね。170センチ以上あるんじゃないかな?」

「ほう……」

部長はしばらく腕を組んで考えているようだったが、やがて声をひそめて言った。

「生野。よく聞けよ」

そついうと部長は声をひそめはじめた。

顔を近づけると部長はやたら汗臭い。

よく聞かなくてもいいように、もっと大きな声で話せと俺は思ったが。

「その女、うちにスカウトして来い」

「……は？」

部長の予想外の言葉に俺は思わず聞き返してしまった。

「だから、その女、川田とか言ったか？柔道部に入れて勧誘して来るんだよ」

「勧誘って、俺がツスカ！？」

思いがけず素つ頓狂な声が出て、練習していた部員はいつせいにこちらを注目した。

「しーっ、声がでかいんだよ馬鹿！いいか、よく聞けよ」

部長はとかく長くて要領を得ない話で俺に説明した。

どうやら部長は期待の新人部員が、女子にいともたやすく投げ飛ばされたという事態が、

柔道部の沽券に関わる一大事と思い込んでいたようだ。そう言われるとそういうような気もしてくる。

で、その体裁を取り繕うためには川田を柔道部に取り込んでしまえばいいと考えているらしい。

そうすれば、部員同士が柔道の技を掛け合ったということではおさまる、と。

一瞬、妙に納得した俺だったが、ちょっと待てと思い直した。

「ちょ、ちょっと、部長。川田は女ツスよ。さすがにうちに来いってのはマズくないツスか？」

この柔道部には女子部員というものは存在していなかった。過去にもそういう人が居たとは聞いたことが無い。

「だからお前は馬鹿なんだよ、この馬鹿！いいか、元からこの柔道部は女子禁制じゃないんだよ。女子部員が居ないのは、ただ単に入部希望者が居ないからなんだよ、この馬鹿！」

偉そうに言えない事情を偉そうに言う部長を、俺は偉いとは思えなかった。

どう考えても得策とは思えない。

「でもやつぱは実際女子が居ると問題あるんじゃないツスか？ほら、着替えのスペースとか……」

「それは大丈夫だ、俺が顧問に掛け合っつてやる。冷静に考えてみる。女なのにお前を投げ飛ばすくらいの逸材だぞ。菊沢がみすみす逃すと思うか？」

菊沢というのは、うちの顧問の名である。

体育教師ということしていくつかの運動部顧問を掛け持ちしているが、

俺にとっては迷惑なことに柔道部に思い入れがあるらしく、非常に熱心な指導で部員には恐れられている。

しかし、菊沢の名前を出されると俄然、現実味が出てくるのも事実である。

流されやすい性質の俺は、部長の話に付き合っことにした。

「わかりました、一応、説得してみます。でもあんまり期待しないでくださいよ」

俺は折れた。

しかし、あからさまにしぶしぶといった感じが気に入らなかったらしく、

すぐに部長の怒声が返ってきた。

「馬鹿、そんな弱気でどうする！いいか、これはわが柔道部の命運がかかっている一大プロジェクトだぞ！」

「はあ……」

声の大きさに比例して高揚してくる部長に比べて、俺は冷めていた。一大プロジェクト……絶対成功しないだろ。

「このままじゃあ、柔道部は団体ばかりデカくて、女にも劣る役立たずどもの集まりだと皆に笑われることになりかねん」

あ、それって、俺のことか。

「はあ……じゃあ、もし断られたら、どうしますかね？」

もし、というか、十中9・9ぐらいの割合で断られると思うんすけど。

「それではわれわれの面子が立たん。そのときは、お前に責任を取つてもらつぞ」

軽い気持ちでたずねた質問に、思いがけなくへビーな返答が返ってきた。

「その川田という奴とお前で、正式に試合しろ。負けるのは許さねん、いいな？」

えーっ、何だよそれ……。部長はそれで話を切り上げて、練習に戻っていった。

アマテラスオオミカミ

次の日、俺は午後の授業をサボり、体育館の裏手に向かった。ある人物に会って話をするためである。

目的の部屋の前で、俺はドアを数回ノックした。

「山田、いるんだろ？返事しろ」

返事は無い。気配も完全にしない。

ただし、中には確実に誰か居る。

ドアは内側から鍵が掛かっているからだ。

そしてその人物は99%程の高確率で、さきほど俺が名指した人物、

山岳部長の山田のはずだ。

体育館裏手の地下部分。

位置で言うと、ちょうどステージの真下あたりに、畳三帖ほどの空間が広がっている。

それが山岳部部室。

俺が今ドアをノックしているこの部屋だ。

少し、この部室と山田の話しよう。

俺らが入学してきたとき、山岳部は全員幽霊部員で構成されており、この小部屋は鍵がかけられ、事実上物置と化していた。

この忘れ去られた秘密の部屋に目をつけた一人の生徒が居た。

現山岳部長、山田である。

彼は何処からか、封印されていたこの部屋の鍵を入手した。やがてこの部室を、自らが引き籠もるのに相応しい楽園へと改装し、よく授業中に雲隠れしてはここへと引き籠もった。

教師達には、未だに倉庫としか認知されていないらしい。

校長が全校集会で最近の校内風紀が乱れてると説教しているまさにその足下で、

山田は寝転がってエロ本を広げていたという訳だ。

灯台元暗しとはまさにこの事を言う。

また、山田は先見の明もあった。

この楽園を独占しようと思わず、自分と同じく授業をフケる生徒達に開放したのだった。

この行為は、一部の出来の悪い男子達から非常に有難がられ、山田は株を大きく上げた。

恩恵に預かった者達はお布施と称して、

ポテトチップスやら週刊誌やらタバコやら漫画本やらを見返りとして部室に置いていく。

楽園はますます楽園と化し、いよいよ快適で充実したものになる。

やがて山田は、岩窟に籠る天照大神の伝承の如く、

学校で過ごす殆どの時間を部室で過ごすようになってしまった。

もはや山岳部長とはかりそめの姿である。

彼は部室から出ない、そのため山にも登らない。

ノックしてから2、3分待っただろうか。

持久戦を覚悟した時、唐突にドアが喋った。

「誰だ？」

耳をすませなければ聞き取れないほどの小さな声。
間違いない、山田の声だ。

「俺だよ、生野だ。柔道部の」

しかし中からの反応が無い。

「……………まさか忘れちゃったんじゃないだろうな？」

冗談で言ったのではない。

山田とはクラスが違うため、情報が断片的にしか入ってこないが、最近はいよいよ岩窟籠りが佳境に入ってきたらしく、HRが終わったら速攻で教室から蒸発するという話だ。比較的ちよくちよくこの部屋に出入りしてるつもり俺だが、名前を忘れられてしまっても何も不思議ではない。なにしろ相手の属性は高校生よりも神や仙人の類に近い。

そんな俺の心配をよそに、ようやく返事が返ってきた。

「……………ああ、あの図体のかい？」

「ああ」

どうやら記憶の奥底には、俺の情報が残っていたようだ。

「あの、頭の悪いあいつか」

「……………」

中からガチャンと鍵の外れる音が聞こえ、ようやく扉が開かれた。ぬうつと出てきた色白で神経質そうな目つきの悪い男、間違いない。山田だった。

山田はドアから顔だけを出すと、目を細めた。アマテラスにとって下界の光は眩しすぎるらしい。

彼はあたりを注意深く警戒し、外に居るのが俺一人だと分かると、ようやく俺を迎い入れた。

「まあ、入んな」

俺が部屋に入るとすぐ、背後で鍵を閉める音がした。

山田は用心深い。

「最近菊沢の巡回が多くてね、物騒でいけない」

ドアにはやたらでかい南京錠がついている。

これおそらく山田が外敵の襲来に備え、新装したものだろつ。あるいは、これも例のお布施なのかもしれない。

部室内は暗くて湿っぽい。

地下部屋だけあって窓は無く、天井の照明はとっくにイカれているため、光源はランタンである。

この中で本を読むのは結構至難の技なので、山田は来客が来ると山登り用のヘッドライトを貸してくれる。

「何してた？」

「別に。お布施もあらかた読んだし、瞑想していた」

おこの場合の布施とは、この狭い部屋に山積みになった本の山のことである。

「精が出るね。ほら、これ俺からのお布施。昨日がジャンプの発刊日だぜ。まだ読んでないだろ？」

俺が週刊漫画誌の最新号を山田に手渡すと、今日は火曜日だったか……等とぶつぶつ呟いてページをめくりはじめた。

しかし、今日俺がここに来た目的は、山田にジャンプを差し入れする事でも、授業をサボる事でもない。

「あのさ、山田。ちょっといいか？」

俺が山田に本題を切り出すと、彼は露骨に厭そつな顔をした。彼は自由を愛する男だった。

それだけに自らの行動を無遠慮に遮る輩を、何より忌み嫌うのだ。

とはいえ、今の俺にとって事態は急を要する。

午後の授業が終われば部活が始まってしまふ。

俺は山田に現在自分が立たされている苦境を説明し始めた。

神サマの助言

俺は部長に川田のスカウトを命じられ、

本日、川田に話をつけようとして昼休みを待った。

メシが終わると、川田はいつもどおり一人で小説を読んでいる。

話しかけようと、席を立ってあいつの席に近づいたその瞬間、

川田の棘のある視線がぎろりと俺を見据えた。

(こ、怖ええ……)

俺は何とも自然な感じで口笛で東京ブルースを鳴らし、そのまま川田の席をスルーした。

ふう、あぶねえあぶねえ……。

「もうよ、川田を動かすのは無理だつてその時悟ったね。

つていうかさ、話するのだけでも敷居高すぎんだよあいつはよ」

俺の話を聞いているのか聞いていないのか、山田はジャンプを熟読している。

俺はそれを無視して続ける。

川田に友人かなんかが居ればそいつに話を通してもらうことも可能だろうが、

奴は極端に人付き合いが悪いときてる。

もともとクラスメイトは川田に興味がないわけじゃなかった。

川田は目つきのキツさに目をつぶればちよつとした美人だし、何より長身で人目を引くからだ。

どうしても目立ってしまう。

実際、裏では野郎連中の評判は、実は良かったりする。

しかし本人は筋金入りの人嫌いだった。

話しかけても「ええ」とか「そう」とか、けんもほろろな態度をとられるし、

全身から霧状の”話しかけるなオーラ”が常にあいつを包んでいて、他人を寄せ付けない。

そこに輪をかけたのが俺が投げ出されたあの事件。

クラスメイトは皆、川田に完全に気圧された。

「……」

俺の話が終わっても山田は相変わらず黙りこくったままだった。

ランタンで照らされた不健康なその姿は、冗談抜きで屍のようだ。

「山田、聞いてたか？俺の話」

俺が遠慮がちに尋ねると、愛想のない返事が返ってきた。

「ああ、聞いていた。おかげで君がいかに馬鹿であるのかが良く分

った」

山田はようやく視線を俺のほうに向けた。

その声は相変わらず聞き取れる限界くらいまで小さいが、早口になっている。

明らかに苛立っている証拠だ。

「だから何だっけって言うんだ。そんなこと、僕には関係ない。そんな話を僕にしてどうしようというんだ？」

その川田とかいう女傑相手に助太刀でもしろっけというのか？

僕は喧嘩すごく弱いぞ」

「いや誰もそんなこと頼んでねえよ。お前なんだかんだで頭良いじゃないよ。

これさ、なんか複雑な話だろ？」

俺じゃ手に負えなくなりそうで、いい解決方法ないかと思ってさ」

山田は腕組みをして、深いため息を吐いた。

「君は馬鹿か？いや、確認するまでも無く君は馬鹿だったな」

癪に障る奴だ。

「僕に言わせれば、君だけじゃなく、その柔道部の部長も、川田とかいう女子も馬鹿だ。

こんな馬鹿な話、どこが複雑なものか。

すこし冷静に考えれば解決法なんていくらでもあるだろう」

「おう、まじか！さすがだな、山田」

俺の露骨なおべっかに、山田は露骨に厭そつな顔を返した。奴は常に安定してテンションが低い。

「しかし僕は気に入らないね。

なんの努力も対価も無しに、他力本願で円満解決を図ろうとする君のその態度がだ。

だから僕はこの件に対してノータッチだ。

そもそも君に力を貸す理由なんてこれっぽっちも無いのでね」

山田の根性はどうしようもなくひねくれている。

その思考回路は毛糸の塊を遊び盛りの子猫に貸してやった状態と同じくらいこんがらがっている。

天邪鬼なこいつが相談を持ちかけられて、

はい、そうですかと二つ返事で頷くとは俺としても考えていなかった。

だから俺は罨を用意しておいた。

こいつめ、まんまとかかりやがったな、阿呆め。

「……そうか。それもそうだよな」

俺は急にしょぼくれたフリをした。できるだけ、元氣なく。

「じゃあ残念だけど、俺そろそろ授業にもどるわ。山田、そのジャンプ。悪いが返してもらおうぜ」

これは賭けだった。

山田はどういったわけか本への所有欲が理解不能なほど強いのだ。

依然、俺の友人にここの漫画本を黙って持ち出した奴がいたが、

そいつは以後決してこの部室を利用させてもらえなかったと聞いた。

山田は読みかけのジャンプを手放さない、そう踏んだ。

「……おい。おい、待て」

賭けは俺の勝ちだった
席を立とうとした俺を、奴は引き止めやがった。

「まあそう急ぐな。次組は笹原担当の現文だろ？」

奴の授業はハルシオン並に睡眠作用が強いからな……。あれの話を聞くくらいなら、僕の話のほうがよほど君の為になるだろう」

俺は内心ほくそ笑んだ。

「ほう。それは俺に知恵を貸してくれると解釈しても良いのかな？
山田先生」

俺の言葉に山田はいかにももったいぶって頷いた。
阿呆め。

「昔、人間の行動と、それに伴う結果を、末端にたくさん枝葉の繁らせた大樹に例えた哲学者が居た。まあ、君のように無学な人間には当然知るべくも無いが。」

今、君は大樹の幹にのっかったアリンコだ。
頂上の葉っぱまでたどり着いて餌を確保したいが、途上の道は幾重にも枝分かれしている。

つまり、これから君がどう動くかによって、到達するエンディングは分岐するという訳だ。

そしてそのエンディングは幹から分岐した先に存在する因子
つまり今回は、柔道部部长と川田という女子だな、
これらの性質をよく分析することである程度の予想がつけられる」

山田先生の弁は淀みなく続けられた。

「アリンコもできるだけ頂上にある美味しい葉っぱを喰いたいだろ
う。」

重要なのは、数あるエンディングの中で”まし”な成果を達成する
ルートを見極め、

そこに到達するのに必要な行動のみを実行することだ。

それにより”まし”な未来を最小限の努力で勝ち取ることができ、
心の平穏を留めることができる。

人生とは常にそうあるべきものだ」

俺は心底感心していた。とても引き籠もりの言葉には思えない。

「言ってることは分かるけどよ。」

俺は馬鹿だからさ、何をするべきかイマイチわからねーんだよ。
だからお前に相談してるんだっつーの」

「心配は要らない、君の頭の悪さは織り込み済みだ。」

これから僕が君の未来について懇切丁寧に解析してやるっ」

山田は俺にとって最良のエンディングを模索してくれることになっ
たらしい。

「まずは、そうだな……。」

これから君は教室に戻り、そのでかい図体に小さじ一杯程しか存在
していない勇気をフルに振り絞って、川田に勧誘を申し入れたとす

る」

「だからさ、それこそ無駄だった。

テニスとかバレーとかならともかく、柔道部だぜ。

川田も一応女子だし、返事は絶対NOだろ」

「一々うるさい奴だな、君は。まあ黙って聞きたまえ。

僕としてもこれは非常に愚策であると考えろ。

冷静に考えて、年頃の女子高生が汗臭い柔道部員にいきなりうちの部に入れと言われた日には、

ドン引きすること請け合いだろう。僕なら絶対に嫌だと答えるね。

そして万一……文字通り一万分の一の確率という意味だが、

万一、川田が柔道部に入る事を了承した場合、

君はクラスメイトの女子と、毎日バラ色の部活動生活を送ることになるわけだ。

そんなラブコメのような展開を迎えることはこの僕が許さない。

よって、君は教室に帰っても、川田に話をつける必要はないというのが僕の結論だ」

「じゃあ、どうするんだよ？」俺は身を乗り出して聞いた。

「川田が柔道部に入らない。これはもはや既成事実だ。

そして柔道部の部長が言っていたな。

勧誘に失敗したら、試合で川田に勝てと」

「おいおいおいおい、それこそ実行不可能じゃねえか……」

「そのとおりだ。川田がよほどの変態じゃない限り、試合を了承しないからな。

だから僕は柔道部部长も馬鹿だと言ったんだ。

スポコン漫画の読みすぎじゃないのか？実に野卑で短絡的な思考の持ち主だ」

山田は会ったこともない部長をこきおろした。

「だが、川田の了承無しに柔道の試合を行うことは十分可能だ」

「ほう、どうということかな？」

いやな予感しかしないが、俺は一応聞いてみた。

「君が投げ飛ばされた件から察するに、

川田という女子は、普段は物静かだが、内心は相当な激情家のようだな。

そこでだ。君はなんでもいい、人格を酷く傷つけるような罵詈雑言を彼女にぶつける。

さすれば彼女は激昂し、また君に襲い掛かるに違いない。

君がいかに怠惰な柔道部員だろうと、その凶体に、相手は女子だ。

落ち着いて迎撃すれば今度は川田に完全勝利し、完膚なきまでに叩きのめす事が可能だろう。

そして部長は面子が立ったと諸手を挙げて喜ぶのだ」

この腐れ外道め。

ランタンに照らされた顔はまさに悪魔のそれだった。

「それ、さすがに川田がかわいそうじゃねえか……」

「君はやられたことをやり返すまでだ。何の問題もないし、一件落着するじゃないか。

ただし、この方法を実行した場合、君の株、特に女子からの信用は大きく下がること間違い無しだ」

山田はニヤニヤ笑っている。クソが。

「それ却下だろ、リスクでかすぎてリターンが部長の喜ぶ顔だけとか、ねえわ」

「全く君は注文が多いな。僕が用意した残りの選択肢はもう一つだけだぞ、心して聞け」

俺はうんざりしていた。

転機

午後の授業を終わらせるチャイムが鳴ると、俺はようやく狭い穴倉を抜け出した。

外は光で溢れていた。

眩しい。

俺は山田を哀れんだ。

あんな密閉された地下室に年がら年中籠っていたら、頭がおかしくなってしまうのも無理はない。

その足で武道館へと向かった。

そして部長の姿を見かけるなり、頭を下げた。

「部長、柔道部辞めさせて下さい！」

暗がりの中で聞き取りにくい声が響く。

「実はこの方法が一番手っ取り早くて現実的だ。

生野、柔道部長に退部届けを出したまえ

川田の勧誘に失敗しました。責任をとらせてください、と。」

山田は言った。

「今回の件で一番非常識なのはその柔道部長だ。奴の頭を少し冷やす必要がある」

ランタンに照らされた影はいつそう濃くなる。
まさに陰謀をめぐらす大悪党の如く。

「君は仮にも期待の新人なのだろう？」

おそろく部長は引きとめようとするはずだ。

そこに君は止めを刺すように言う。

本来、部の看板を背負うべき自分が柔道部に泥を塗った。

自分が退部することで川田との件は私闘となるので、

柔道部に迷惑が掛からなくなる、とな」

「ああ、なるほど……って、

じゃあ俺は柔道部を辞めなきゃいけねえってことかよ!？」

俺がノリツッコミをすると、山田は平然と答えた。

「そうはならない。

いかに柔道部長が馬鹿でも、君の一言で己を省みて自分の愚かさ
気がつくからだ。

こんなくだらない一件で部員を減らすような真似は流石にしないだ
ろう。

そして君の真摯な姿勢に部長はじめ部員皆は感心し、君の評価はむ
しろ上がるのだ」

ああ、言われてみれば、そうかもしれないな。

いや、俺の演技力をフル活用すれば、きつとそうなる。

俺は今日始めて山田に感謝した。

「部長、柔道部辞めさせて下さい！」

部長は目を白黒させていた。

俺は山田との打ち合わせどおり、川田の勧誘に失敗したので責任をとるといふ旨を伝えた。

「い、生野……」

返事に窮する部長に対し、

俺はできるだけ誠実そうに、そして心から申し訳ないフリを装って続けた。

「部長、俺は昨日ハツパかけられたことを、
午後の授業サボってずっと考えてたんす。

俺はだんだん自分が情けなくなっちゃったんすよ……。

毎日こうやって部長に鍛えてもらってるっていうのに川田に投げ飛ばされて、

みんなの顔に泥を塗っちゃったんす。

……俺は頭悪いなりに考えたんすよ。

俺さえ退部すれば、川田との件は柔道部とは一切関係なくなるんすよ。

そうすりゃ、部長も皆も今回の件で陰口たたかれる筋合いはねえ。

俺は男ッス。

責任取らせて欲しいッス！」

俺は再び頭を下げる。

決まった。

ドラマのワンシーンのような台詞に我ながらシビれた。

俺は皆から一目置かれ、柔道部内での地位は確固たるものになるに違いない。

「……そうか。すまなかつたな」

部長の声は今にも消え入りそうなほどかすれていた。目には涙を浮かべている。

「お前の気持ちはよく分かった、生野。

……本当に残念だが、仕方がない。

お前の退部を、許す！」

柔道部長は計り知れないほどの大馬鹿だった。

「……おい、おい！」

目を開けるとランタンに照らされた貧相な悪魔の顔があった。

「書籍を枕に寝るな！本への侮辱だ」

俺は、漫画をめくっている途中、どうやら山岳部室で眠りこけてしまったらしい。

謝る俺に山田の憎まれ口は続く。

「大体、君はいつまで居座るつもりだ！？今日で三日連続で来ているじゃないか！！」

僕としても見目麗しい美少女ならともかく、君のようなムサイ大男とこんな狭い部屋にいつまでも押し込められている状態は御免こうむりたいのだ。あいにく僕にはその気はないのでね」

柔道部をクビになった日から、俺は授業後の時間を持て余した。行き着いた場所がここであった。

「でもよ、山田。俺がここにいるのはお前のせいだろ。お前の言つとおりに動いたぜ俺は。そしたら、これだよ」

俺は自分の首に手を当てた。

「自分の行動の責任を他人のせいにする。まさに馬鹿の典型、最低だな、君は」

皇帝並に尊大な山田は自分の非を決して認めない。

俺は憤慨して寝返りをうち、奴に背を抜ける。背後からため息が聞こえた。

「……仕方がない。君の移住先を決めてやる。君のためじゃなく、僕のためにな」

俺は奴の発言を無視した。

「心配するな。冗談抜きで優良物件だ。なにせテレビ見放題だからな。僕がまだこの部屋を見つけていなかった時、そこに在籍しようかと考えていた程の物件だ」

テレビ付きの優良物件？

物件Ⅱ部室という意味か？

興味が沸いてしまった俺は悔しいが顔をあげた。

「それって、どっかお勧めの部活があるってことか？」

山田は頷く。

「ナマ部だ」

転機（後書き）

2011/10/20プログラム変更しました。
話の内容に変更はありません

ナマ部にて

ファミマがファミリーマート、
プレステがプレイステーション、
ギロツポンが六本木で、
キムタクが木村拓斗（E組のブサメン）の略称だとくれば、
ナマ部とは当然、生物部のことを指す。

生物部……？

そんなの、この学校にあつたか？
地味すぎて存在すら怪しかったが、
とりあえず担任に生物部の体験入部を試みたいと言ってみた。
顧問を紹介され、あっさり了承された。
そして今、俺は生物部部室の前にいる。
部室とは何てことはない、生物実験室のすぐ脇にある実験準備室の
ことだ。

ここには、たまに授業で使用するテレビが格納されている。
なるほど、この部室を自由に使えば、これが見放題というわけか。

「失礼しまーッス」

俺は勢い良くドアを開けて中に入った。
顧問が話を通し、先輩部員が活動内容を説明してくれるとのことだ
った。

「やあ、よく来たねえ」

やけに甲高い声の、しなびたキュウリのような顔の貧相な小男が居た。

「うッス、体験入部に来た生野です」

「僕は佐藤っていうんだ。まあよろしくねえ」

佐藤という男、佐藤以前にキュウリだ。キュウリは俺を見上げて言った。

「おお、体デカいねえ。180はあるだろ？」

「186ッス。柔道やってたんで……」

こいつが部長なのだろうか？俺が尋ねると、キュウリは首を横に振った。

「いやいや、僕は”元”部長。部長は僕の目の前にいるよあ」

この部屋には俺とキュウリしか居ない。

「君が部長。だってここの部員、ゼロだしねえ。

たぶん、幽霊部員はいると思うけど、

僕は顔すら知らないからねえハハハハッ！」

キュウリが突然発した奇声は、どうやら奴の笑い声のようだ。

「あ、僕はOBねえ。三年なんだよあ。残念だけど一緒に部活はできないなあ。

僕、もうすぐ公務員試験うけるんだよあ。ほら、市の職員採用試験」

俺は役所で書類にハンコを押すキュウリを想像した。

「はあ………すいません。忙しいときに時間とってもらって」「いやいや、いいのいいの。僕としてもちゃんと収穫まで終わらせなかったし。」

それに引継ぎもしたかったしねえ。といっても部員いなかったんだよねえハハハハッ！」

キュウリは突然笑いのスイッチがはいつて困る。
ん？収穫って何だ？

……いや、それ以前に根本的な質問をキュウリにする必要があるな。

「すみません、俺何もしらないんすけど、そもそも生物部って何やる部なんすか？」

俺の阿呆のような質問に、キュウリはしれつと答えた。

「うーん………自由？」

なんで疑問符つくんだよ。

「自由ツスカ………」

「結局何をやるかは君しだいだねえ。」

まあ、基本は裏の畑をいじるんだけど、土仕事嫌いならしないでいいし。

実験室の水槽に何か飼ってみるのもいいけど、面倒なら飼わなくてもいいし。

そもそも部活したくなくて帰りたいかったら帰ってもらって全然いいしねえ。

まあ、だから部員いないんだけどハハハハハハッ！

あ、そしてこのテレビ。もし見たい番組あったなら、ずっと見てて

も良いよお」

なんというやる気のなさ。

山田が好きそうな環境だ。

でもテレビ見放題というのは結構魅力だな。

地下室じゃない分、授業を抜け出すには使えなさうだが、

昼休みにいいとも見れるな。

俺は部そのものじゃなくて、部室を気に入った。

「まあ、こんな部だけど、どう？」

「すばらしいッス。興味でてきたッス」

部室にな。

「ふうん。じゃあ一応案内だけはしたいから、良かったら裏の畑に一緒に来る？」

まあ来なくてもいいけど」

キュウリは部室の奥のガラス戸から外へ出て行った。

俺もそれに付いて行った。

「春に一応、いろんなもの植えたんだ。そして今は実りの秋というやつだねえ。」

でも部活はとつくに引退したし、収穫する時間がなくて」

案内された先は、畑とは名ばかりの雑草の海だった

「ほら、君が今まさに踏んづけてるのがホウレンソウ。で、こつちが白菜。」

となりがサトイモ、向こうはジャガイモ。手入れ適当にしてもそれなりに育ったものだねえ」

そのほかにもキュウリは植えているようだった。

だが、雑草に埋もれた野菜はどれもこれも手付かずのまま、放置された状態だった。

収穫とは、このことか。

「そうそう。よければ君も手伝ってくれない？まあしたくなかったらしくても全然いいけどねえ。」

最初は疲れるかもしれないけど、やってみると意外と楽しいものだよお。」

もし手伝ってくれたら、とれた野菜自由に持って行っていいしねえ。親御さんよろこぶと思うよお」

とりあえず暇と体力を持って余していた俺は、キュウリの言葉に頷いた。

しかし俺は柔道で生きてきた男だ。

畑仕事はやったことがない。

何をしたらいいのかさっぱり分からないのでキュウリの指示に従う事にする。

ハサミを渡されて、茄子を摘んだり白菜を摘まなかったり、土にクワを入れたりした。

地下で腐っていた体に汗がにじんでくる。

予想してたより力仕事だった。

キュウリは予想してたより親切でいい奴だった。

作業の合間合間に、畑仕事の概要をわりと的確に説明してくれた。きつと採用試験に合格したら、よい役所職員になるに違いない。

まず一番最初の仕事として、畑を耕さなければならぬが、最悪耕さなくてもいいということ。
土には肥料を与えるべきだが、面倒なら与えなくてもいいということ。

種を播く場所にクワを使ってウネを作ったほうが好ましいが、疲れたなら作らなくてもいいということ。

播種適時が来たら、いよいよ種を播くが、うっかり時期を外れてもいいということ。

種にかぶせる土は、種の三倍量くらいでいいが、ドサドサかぶせて足で踏んづけてもいいということ。

「種から芽が出てきたらある程度間引きしたほうがいいけど、まあ初めてのときは分からないだろうし、しなくていいと思うよ。そのうちドンドン雑草生えてくるけど、取っても取らなくても良いよ。あと……」

「ちょ、ちょっと、先輩。さつきからやってもやらなくてもいいって、そればつかじゃないツスか」

「だってこれ、売り物じゃないし、実際そうだもの。」

そもそも農業ってのは、植えた後どうなるかは、ある意味植物まかせなんだよな。

だから僕らの行動が結果に直結するとは限らないわけ。

人生と同じで、なかなか思惑通りに進まないものなんだなあ。

あ、ちょっと言い訳入ってるけどねえハハハハハ！」

キュウリの言葉は山田が言った台詞と間逆だった。

先日の柔道部の一件を見た限りでも、こちらの方がよほど真実味がある。

収穫は思ったよりも時間と労力の要る作業だったが、三日ほど付き合つとあらかた終わった。

「はい、ごくろうさま。おかげで助かったよお」

先ほどまでサトイモが植えられていた場所には、等間隔に穴が開いてある。

なんかよく分からんが、妙な達成感がある。

この感覚、スポーツに似てる……か？

「まあ、こんな感じだよお、うちの部は。もちろん畑は荒らしたままでもいいし。」

どう？入部する気になったかい？」

俺はカバンから入部届けを出した。

キュウリは「ふうん」と言つてそれを受け取つた。

ナマ部というカイモムシ部

キュウリはそれから様子を見に来て、俺に指示をしていった。俺はキュウリの信託を受け、畑の後片付けをしなくてはいけない。俺がせつせと動いている姿にキュウリは言った。

「そんなに張り切る必要無いと思うけどねえ」

うっせえ、チンタラ働くのは俺の性根に合わねえ。

その日のうちに仕事は終わった。

次に何をすべきかとキュウリに尋ねたところ、何も無い、と言う。

この地方では冬に相当の積雪がある。

やることといったら、その直前に冬野菜の収穫を行うことのみらしい。

俺は愕然とした。

つまり恐ろしいことに、もはや活動する必要が無いのだ。

一方、柔道で鍛えたこの体は無駄にエネルギーを持って余っていた。

俺は一呼吸置いてキュウリへの質問を少し修正した。

何かやっておいたほうが良いことは無いかと。

キュウリはうーん、と唸りながら、

「じゃあ、今のうちに稲藁でも運んでおく？」

この町はクソ田舎だ。

N高の周囲には何も無い。

四方を完全に田んぼに囲まれている。

俺はグラウンドの裏に案内された。
そこにも当然田んぼがある訳だが、
途中のあぜ道のわきにワラが積まれていた。
キュウリはそれをひょいと掴むと、
俺に投げてよこした。

「これ、その一輪車に積んでえ。持っていくから」

藁は敷き詰めておけば雑草の生長を妨げ、
放り投げておけば、なんかわからん養分が土に染み込んでいく魔法
の道具らしい。
勝手に持ってたっていいのかと聞くと、毎年もらってるから大丈夫と
の事。
藁を積んでいると、近くから野球部の練習の音が聞こえてくる。

(ああ、あいつらががんばってんな……)

自慢じゃないが、俺はこれでスポーツ全般が得意だった。
この体格が有利に働いているのは事実だとしても、
体を動かすことそのものが好きだったというのは大きい。
柔道部を退部した後、俺は野球部の友人から勧誘されたりした。
お前なら来年絶対レギュラーになれると、その友人は力説したが、
俺は断った。
俺はスポーツすること事態は好きだが、運動部というものが苦手な
のだ。
勝つためだけの厳しい練習、運動部特有の先輩後輩の上下関係。
それらに意味を見出せなくなっていたのだ。
現に、勢いに乗って柔道部をやめた後にもそれほどの後悔は無かつ
た。
野球部の勧誘を断ったのも自然な流れといえる。

そして今、バットがボールを打ち返す乾いた音を聞き、俺の中に、もやもやした感情が芽生え始めていた。このままでいいのかという、なんともいえない焦燥感である。

(どうしようもないヘタレだな……)

山田に見透かされれば間違いなく、馬鹿め、と一笑に付されるだろう。

「これでラストお」

物思いにふける俺を、気の抜けたキュウリの声が現実に戻した。そうだ、今の俺はスポーツ少年ではなく、ナマ部というなんかよくわからない部活の部員なのだった。見れば一輪車には山盛りのワラが乗っかっていた。

「これくらいあれば一年は余裕で持つよお」

俺から言わせれば一年どころか一生藁には困らなそうだった。一輪車を押して部屋に戻ろうと、180度ターンをしたとき、俺の視界に何かが入り込んだ。藁を敷き詰めてあった地面で、何か動いている。

「キュウ……先輩、これって」

「ああ、これ」

キュウリはそれを摘んだ。ウネウネと動く白いイモムシだ。

「カブトムシの幼虫だねえ」

先ほども言ったとおりN高は四方を田んぼに囲まれているが、さらにその向こうには山がすぐそこに迫るほどのクソど田舎なのだ。そこらの林からブーンと飛んできた野良カブトムシも、飛んでる途中もうこのN高でいいやと投げやりな気持ちになったのだらう。

この藁の下に大量の卵を産んだ。
で、そいつらが一斉に孵化したわけだ。
居るわ居るわ。

悪夢のような光景というべきか、それともちょっとした壮観というべきか。

しかし俺も昔に幼虫の現物を見たことがあるが、こいつはちょっと様子が違う。

「カブトムシの幼虫って、こんな小さかったツスか？」

俺の知っているカブトムシの幼虫は、もっと丸々と太ってデカかった。

目の前に居るこいつらは体長が5センチくらいしかないが、この倍はあった気がする。

「ああ、こいつら幼虫の状態でも脱皮するからね。大きくなるのは多分これからだよ」

こいつらはこのまま藁の下で暮らし越冬するのだそうだ。
俺は閃いた。

「先輩、俺、こいつら飼ってみます」

俺は常日頃、同情している人間がいる。
全国区で通用するような学力があるのに、
進学校の多数あるA市まで通学するのが困難なため、
もうこのN高でいいやと妥協してしまっている学生達である。
地方都市の現実だ。
不運にもN高付近に生まれたばかりに、である。

同様に、この幼虫達に同情した。
親が同じような感覚でN高で妥協した結果がこれだ。
どう見ても生息密度が高すぎる。
そして餌の3分の1ほどを俺らに持っていていかれてしまった。
多数は越冬する前に死ぬ。
不運にもN高付近に生まれたばかりに、である。

この幼虫の中にも、
将来恐ろしく強いエリートカブトムシに進化する奴が居るかもしれ
ない。
そんな逸材達が日の目を見ずに、N高という舞台で無為に死んでい
くのを哀れむのだ。

「ふうん、まあいいかもねえ。こいつら世話するの簡単だし」
俺の提案にキュウリは簡単に頷いた。
積んでいた糞を圃場にブン投げると、水槽を持ち出して引き返した。
幼虫にとってこの短時間ですら天日にさらされる行為は、こうかば
つぐんらしい。
すっかりバテて動かなくなってる奴が多数見られる。

あまり数を多くしないほうが言いというキュウリの助言を、俺はしぶしぶ受け入れ、とにかく元気のいいエリート候補生だけを選抜して持ち替えることにした。

冷静に考えてみると、キュウリの発言は的を得ていた。

そもそもこいつら、目に付く範囲だけで100匹くらい居やがった。全部持ち帰っていた場合、ナマ部はカブトムシ部へと進化していただろうな。

それでも水槽には20匹くらいの幼虫が収まることになった。

来年の夏、こいつらが一斉に羽化し、スイカにかぶりついている様子を俺は想像した。

なかなか楽しくなりそうだ。

カブトムシの幼虫入り水槽を机にセットすると、キュウリは言った。

「それじゃ僕はそろそろ勉強にもどるよお。じゃあねえ」

こうしてキュウリはナマ部を去っていった。

思えば奴には世話になった。

そして俺は真正正銘のナマ部長になったわけだ。

キュウリがいなくなつて、やることも無くなつた俺は、毎日『水戸黄門』の再放送を見ていた。

水戸黄門シリーズでは、やはり東野英治郎が秀逸だな、などと

つらつら考えていると、準備室のドアをノックする音が聞こえた。

俺は思わずイラツとした。

あと5分もすれば黄門がどや顔で印籠を出すところだったのである。どうせ山田あたりが『天才テレビ君』でも見に来たのだろう。そう思っつて不機嫌なツラでドアを開けると思いもしない人物が居た。

「……………あ、生野君」

俺の苦手な川田だった。

イモムシと乙女心と秋の空

「よう川田、何か様か？」

意表を突かれた動揺を見せぬよう、俺は努めて冷静を装った。

「……」

問いかけに返事は無い。

川田は相変わらず糾弾してくるような鋭い視線で睨んでくる。やはりこいつは俺の天敵のようだ。

へびに睨まれたカエルさながら、俺の肝っ玉はすっかり縮み上がってしまった。

相手の沈黙にビビるあまり、ようやく出た言葉は若干上擦る。

「とりあえずさ、入れば？」

言ったものの、非常に気が進まない。

なによりもまず川田を刺激してはいけない。

動機はともかく非常に紳士的な俺は、部室に入った川田に椅子を差し出す。

奴はそれに腰掛けると相変わらず不機嫌そうなツラで部屋を見回した。

隠れ家をゲシュタポに検分されている気分だ、クソが。

年中不機嫌そうな川田のツラから、中身まで実際不機嫌かどうかを

判じるのは微妙なところだが、
そういう負のオーラを発しているのはヒシヒシと感じる。
俺は奴の視線を避けるように斜め向かいに座ったが、相変わらず川
田は押し黙ったままだった。
さて、どうしたものかと思案していると、

「このテレビ……」唐突に川田はテレビを指差した。
俺は条件反射で思わず立ち上がる。「あっ、はい、スンマセン！」
よし決めた。

俺は卑屈なまでにへりくだることにした。
川田が何をしに来たかは予想できないが、どうせ俺をなじりに来た
かなんかだろう。
触らぬ神にたたりなし。触ってきた神には土下座しろ。
面倒が起こる前に謝ろう。

「邪魔ツスね。消しますよ」

「あ、いや……さ。水戸黄門、私も毎日見てるんだ」

ほう、なかなか渋い趣味だ。

しかし油断してはいけないと俺の参謀司令部は念を押す。
世間話して警戒を解かせて、弱点をみせたら”ガツ”と来る作戦か
もしれん。

「あっ、はい！　じゃあ自由に見てって下さいッス！」

水戸黄門はちょうど佳境だった。殺陣のシーンが始まっている。
しかし、川田は大勢の悪党共と格闘するスケさんよりも俺の方に矛
先を向けた。

「生野君、面白いわね、その口調」

やはり棘のある響きだ。

「いつもの調子でいいよ」

そうか、へりくだるのはやめよう。男らしく。

そして俺は頭を下げた。へタレらしく。

「あーいや、あのさ、わかったよ……それより悪かったな、いつかのこと。」

おれ頭悪いから空気読めなくてよ、ちょっと馴れ馴れしかったよな、うん」

川田は眉をしかめる。

ひい、ごめんなさい。

「え？謝るのうちのほうだけど。今日そのために来たし」

何？孔明の罫か？

俺は警戒を解かずに川田の話を聞いた。

「あれさ、うちの勘違いだったんだ……ごめんね。」

あのときついカーツとなっちゃって……。

生野君柔道やってた人だから手加減無しでやったんやけど。

あ、そうじゃなくて、えーと……」

川田はしどろもどろになって話をしていた。

幾分冷静になって観察する余裕ができてきた俺は、あることに気がついた。

川田には関西弁の訛りがある。それも中途半端な感じに。N高では関西弁を喋る生徒はめったに見ない、というか居ない。慎重に言葉を選ぶかのように川田の話は続く。

「そんで話、聞いたよ。……生野君、柔道部やめたんだってね。それ、私のせいだよな、やっぱ」

あーなるほどね。そういうことか。俺はやつと納得した。

本日、川田が醸し出す負のオーラは、”悪いことしちゃった許してのオーラ”だった訳だ。まったく実に分かりにくい。

言われなければいつもの、”機嫌悪いから近寄るなオーラ”と区別つかねえ。

……でも待てよ。

こいつは少し勘違いしているようだ。

俺が柔道やめたのは半分は俺の意思で、のこり半分は山田の阿呆の責任だしな。

川田にブン投げられた件はきつかけに過ぎない。

俺は株を上げようと川田に弁明した。

「いや、ねーよ。俺柔道やめたのは俺自身の問題だから。

あの事件関係ないって」

「いやでも、それでも私、生野君に酷いことしたから……」

ごめん！

そう言うと川田は頭を下げた。

へえ、良い所あるじゃねえか。

俺はこいつを少し見直した。

「分かった。じゃあ、これで”あいこ”な。イモムシ女の発言はノ
ーカンつつーことで」

俺がそう言うと川田は顔を上げた。

無愛想だった表情には変化が出ていた。

信じ難いことに目を細め、顔をほころばせたのだ。

しかも、へっ、とか、ふふん、とかそういう笑い方じゃなく、

普通ににこっ、とした笑いだった。

こいつがこっという表情をしたのを始めて見た気がする。

……あれ？

喉に魚の骨が刺さったような妙な違和感を感じた。

何かがおかしい。何だこのモヤモヤ感？

いまだかつて女にモテた試しが無い俺は、自らの置かれたシチュエ
ーションに戸惑いつつも、

原因を探るため、現在の状況を出来るだけ客観視することに集中し
た。

今、目の前に居やがるのは確かに俺の天敵の川田のはず。

しかしどうしたことが、今やいつもの刺々しい雰囲気緩和されて
いる。

それが違和感の正体か？

否、それは確かに信じがたいことだが何も問題は無い。

鬼の目にも涙と言うが、ドライアイスの如く冷酷な女傑川田も、

俺の男気と寛大さに触れ、思わず心揺さぶられたといったところだ
ろう。

もつとも俺にとって同年代の女子の心中というものは、先週捕まえたカブトムシの幼虫が何考えてるのかと同じくらい推し量るのが難しく、真相は分らんが。

しかし目の前の川田は明らかに先程より機嫌がいいのも確か。今回に限れば当たらずとも遠からずという自信はある。

では違和感とは何か？

どうやらそれは川田の方では無く、俺の方にあるようだった。

……俺？俺の中？

川田との会話で俺の中で何かが変化した……？

そんな脳内会議にお構いなく、川田のおしゃべりは続いた。いまや教室では見せたことが無いほど口が軽くなっている。

「水戸黄門、終わっちゃったね。うちね、帰宅部だから家帰ったらやることなくって。

ついこれ見ちゃうんだ」

ほう。エロゲーだとこれは何かのフラグだな。

「ああ、そっぴゃここテレビ見放題なんだわ」

「ええ、嘘！？」

川田はやけに食いつきがいい。

「ホントだって。俺なんかさ、毎日”いいとも”見てるんだぜ。

昼休み、俺教室いねえだろ？ 飯もここで喰うし、ずっとここに居るわけよ」

へえ、羨ましいなと川田は呟く。

「私ね、ほら……友達居ないから。昼休みとか、手持ち無沙汰なん

だ

まあそれは知っている。そしてそれは明らかにお前に原因がある。おもわず口に出そうになった言葉をぐいと飲み込んで、俺は少し考えた。

驚いた。こんなことをあの川田がカミングアウトしてくるとは思いもしなかった。

これは良い機会と、思い切って少しばかり突っ込んだ質問をした。前から不思議に思っていたことだ。

「あのさ、なんでお前って何でいつもあんな無愛想なの？」

お前のその雰囲気独特で怖いんだよ。

だから友達できねーんだよ。

こうして話せば普通なのに。

「無愛想……だよ、やっぱり。……でもさ、うち目立ちたくないんだ」

目立ちたくないから無愛想を装うということか。

こいつもこいつなりに苦労していたんだと初めて気がついた。

「つーか俺投げ飛ばして啖呵切った時点で目立ちまくりだけだな」

「だよ」

川田は自嘲的に言うともた笑った。

ああ？

やべえなこれはおい。

ここに来て俺は今までの違和感の原因をすっかり理解することが出来た。

やはり俺は山田の言うとおり馬鹿だった。

俺はようやく認識した。

川田かわいいな、と。

次の瞬間、俺は意を決していた。

一世一代の大勝負に出ることにしたのだ。

「川田」「ん？」

「いつそナマ部に来れば？」

俺は心の中でガッツポーズをした。

頭上からド派手なスポットライトの光と盛大なファンファーレがそそがれてくる。

やったな、俺！

これでいい！

いや、むしろこれがいい！

心の中の俺達は皆一様に俺に惜しめない拍手と喝采を送る。

ここはカーネギーホールかよ？　と思わず突っ込みたくなるほどいつまでも鳴り止まないそれに、

英雄となった俺はステージ上でゆうゆうと手を振って応える。

視線をステージの端っこに向けるとなぜか山田が居やがる。

卑屈気味に背中を丸め、臍を噛む奴の姿が見える。

俺はツカツカと歩み寄ると奴の肩に手をおいた。

振り返ってこちらを見た貧相な顔に向かって吐き捨てる。

ざまああっ！！！！　阿呆めっ！！！！

俺は奴を見下ろしてほくそ笑んだ。

ごめんなあ、山田。

ほんつと、お前には悪いと思ってるよ。

でも俺、これから川田と一緒にバラ色の部活動生活送っから！！

……いやいやいや落ち着け俺。

今現在、あの阿呆のことはどうでもいい。

千載一遇のチャンスなんだ。

これはモノにしない手は無い。

死ね、死ね！ 山田、死ね！

俺のために死ね！

俺は意識の世界から山田を葬り去ることに集中した。

「んー、でもうち、ナマ部ってどういうものなのか、なんも知らんな」

現実の世界に引き戻されると川田の声が響いてきた。

独特のその口調も聞き手の意識一つで天使の声にもなりうるものだ。いやあ何も問題ないのだよ川田君。

「俺だつて一週間前までそうだったぜ」

俺は生物部には部員が一人（つまり俺）しか居ないこと、部のモットーが”自由”であることを告げた。

「お前人嫌いなのはなんとなく分かるけどよ、ここなら誰に気を使う必要も、さらさらねーし」

「んー」

川田は腕を組んで真剣に考え込んでいる。
よしよし。もう一押しだ。

俺が勝利を確信したとき思わぬ反撃が来た。

「じゃあさ、ナマ部って、今何やってるん？」

核心を突かれて俺はうろたえた。

マズい、実にマズい。

水戸黄門を見るのが日課とは言えん。

しかし、実際のところ、何もやること無いし……。

追い詰められた俺は閃いた。

そうだ、アレがある。

「ちょっと待ってな」

そう言っつて椅子から立つと、俺は隣の実験室に駆け込んだ。
戻ってくると、手のひらの上に乗せたものを川田に見せた。

「ほら、見てみ」

俺の手の上では、この前捕獲したカブトムシの幼虫 がクネクネと
元気に動いていた。

「い……ッ!？」

はい、俺は気づきませんでした。

川田が硬直する様子を。

「いやあああああああ……！！！！！！！！！！」

川田は猛ダツシユでナマ部室を出て行った。

そして彼女が生物部員になることはついに無かったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6644x/>

N高徒然記

2011年11月14日09時40分発行